

聖書：ローマ 1：1～4

説教題：力ある神の子

日時：2015年3月1日

今朝から新約聖書の書簡の一番最初に置かれている「ローマ人への手紙」から学んでまいりたいと思います。ある人は言いました。「このローマ書の真理の深い理解と関係なしに起こった教会史上の重要な霊的ムーブメントはこれまでなかったし、おそらくこれからもないだろう。」確かに歴史を振り返りますと、そのことを印象付けられます。たとえば4世紀のアウグスティヌス。彼は放縦と不道德の生活を送っていた自分を責め、心の葛藤に苦しみ、ある日の午後、庭園で泣いていました。その時、隣家から子供のような声が、「取りて読め」「取りて読め」と繰り返し歌うのを聞きます。その声に導かれて彼は聖書を開き、ローマ書13章最後の次の言葉を読みました。「遊興、酩酊、淫乱、好色、争い、ねたみの生活ではなく、昼間らしい、正しい生き方をしようではありませんか。主イエス・キリストを着なさい。肉の欲のために心を用いてはいけません。」この瞬間、彼は回心を経験します。彼は『告白』の中でこう言っています。「この節を読み終わると、たちまち平安の光ともいふべきものが私の心の中に満ちあふれて、疑惑の闇はすっかり消えうせた。」

16世紀の宗教改革者ルターもそうです。彼は雷に打たれて献身の誓いをし、修道僧となって熱心に心の平安を求めましたが得られませんでした。神に喜ばれる者になると難行苦行を試みるも、取り組めば取り組むほど救いは逃げていく。心の深いところでは達成不可能な義を要求する神に憎しみさえ覚える状況でした。そんな中、彼はローマ書の研究を通して、1章17節の「神の義」という言葉の真の意味を理解します。すなわちこの義は信仰による義であって、行ないによって勝ち取る義ではない。この福音の真理の再発見は彼の心と知性と全人格を新しい光で照らし出します。ルターはこの時の経験を述懐して言います。「私は新しい人として生まれ変わったことを感じた。このパウロの言葉は、まさに私にとって天国の門であった。」ここからプロテスタントの宗教改革が始まります。

もう一人、18世紀のジョン・ウェスレーの回心もそうです。彼は頭では信仰義認の教えを知っていましたが、心でそれを感じる事ができないでいました。そんな悩みの中、国教会信徒の集まりに気が進まないまま出かけて行き、そこで一人の兄弟がルターのローマ書注解の序文を読んでいるのを聞いて回心を体験します。彼はこう言っています。「1738年5月24日9時15分前頃、私は私の心が不思議にあたたまるのを覚えた。私は救われるためにキリストに、ただキリストのみに信頼したと感じた。そしてこの私の罪をキリストが取り去って下さり、罪と死の律法から私を救って下さった

という確信が与えられた。」 こうして彼は 18 世紀の偉大なりバイブルの器として用いられました。このようにローマ書は人々の人生を変え、また教会の歩みを大きく変え、導いて来た書と言えます。皆さんの中にもこのローマ書に特別の愛唱聖句がある方も多いのではないのでしょうか。私自身も、洗礼の決心へと導かれた御言葉を始め、信仰の歩みの柱となる御言葉をこのローマ書からいくつも頂いて来ました。

なぜローマ書がこのように用いられて来たかは、この手紙の宛先や執筆事情を考慮するとより納得することができます。宛先はローマにある教会です。この教会はパウロによって建てられた教会ではありません。使徒の働き 2 章のペンテコステの記事には、ローマから来た人々もそこにいたことが記されていますが、その彼らがローマに戻るにより、また当時の世界帝国の主都ローマに多くの人々が入り出す中で、この教会が形成されて行ったのでしょうか。その彼らにパウロはどんな目的でこの手紙を書いたのでしょうか。15 章 23 節：「今は、もうこの地方には私の働くべき所がなくなりましたし、また、イスパニヤに行く場合は、あなたがたのところ立ち寄ることを多年希望していましたので…」パウロはこの手紙を第 3 回伝道旅行でコリントに 3 ヶ月間滞在した時に書きました（使徒 20 章 1～3 節）。彼はそれまでの 3 回に渡る世界伝道旅行を通してギリシャまでの伝道は終わったと考えていました。そこで今度はイスパニヤすなわちスペインまでとのさらなる西方伝道の志を与えられていました。その西方伝道を推進する拠点としてはどこがふさわしいのでしょうか。当然、首都ローマです。これまでの異邦人宣教の基地であったシリアのアンテオケ教会からでは遠過ぎます。しかしまだパウロはローマを訪れたことがありません。したがって今後の伝道のためにはローマの教会との交わりが必要です。そしてその交わりのためには福音における一致が必要です。そこでパウロは自己紹介を兼ねて、自らが神から授かり、人々に伝えて来た福音の教理を、ここに組織的・体系的に語ったのです。

パウロはこの手紙の中心聖句とも言える 1 章 16 節でこう言っています。「私は福音を恥とは思いません。福音は、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、信じるすべての人にとって、救いを得させる神の力です。」パウロはこの福音を「神の力」「信じるすべての人に救いを得させるもの」と言っています。そのような福音が組織的に順序正しく述べられているのですから、これに接する人々の人生が変えられ、教会の歩みも変えられて来たのは至極当然と言えます。私たちの願いも同じです。このローマ書の福音が私たちの生活を変革してくれるように、また教会の歩みをその力によってさらに導いてくれるようにと祈りつつ、この書を読み進んでまいりたいと思うのです。

さてパウロはその福音についてさっそく冒頭から語り始めています。本来は 1 節の「神の福音のために選り分けられ、使徒として召されたキリスト・イエスのしもべパウロから」と始まって、7 節の「ローマにいるすべての、神に愛されている人々、召さ

れた聖徒たちへ。」と続くはずですが、彼は「神の福音」と語った瞬間、—原文ではこの言葉が1節の最後に出て来ますが、—彼は挨拶半ばで大きく脱線して、福音についていくつかのことを語り始めます。

その一つ目は、2節にありますように、この福音は「神が、その預言者たちを通して、聖書において前から約束されたもの」ということです。ここに福音についてのパウロの関心の一つが現われています。それは旧約聖書との連続性・一貫性という関心です。神は決して思いつきで事をなさいません。神はるか昔からの一貫したご計画にしたがって導いて来られました。ですからパウロが伝える福音は、旧約時代の預言者たちが語った真理と一致するのです。時々、新約聖書のある一節を取って、今まで聞いたことがないような新しい教えを述べる人たちがいますが、そういう人たちはたいてい旧約聖書と矛盾することを言います。そしてそのことを指摘すると、「それは前の時代の話でしょう」と言い、旧約を軽んじます。しかし神の福音は、前から約束されて来たものと一致するのです。ですから私たちは新約聖書に劣らず、旧約聖書にも良く親しむことが大切です。そうしてこそ、ついに新約において現わされた神の恵みのわざを一層の感謝をもって喜び楽しむことができるのです。

もう一つパウロが語っていることは、福音は「御子に関すること」ということです。「御子」は、原文では前に出て来た「神」を受けて、「彼の子」と書かれていますから、三位一体の第二人格なる「子なる神」を指しています。このお方こそ福音の主題です。ですから聖書の細かなことが色々分かって、それが御子につながるものとして理解されないなら、聖書が本当に分かったことにはなりません。ルカ 24 章 44 節：「わたしについてモーセの律法と預言者と詩篇とに書いてあることは、必ず全部成就することでした。」 その御子はどういう方か、パウロは続けて大切な要点を記します。ここには御子について私たちが知るべきエッセンスがあります。もっと言えば福音のすべてがあると云っても良い。パウロは二つの観点から述べます。

一つ目は、「肉によればダビデの子孫として生まれ」。これは一言で言えば、神の御子のへりくだり（謙卑）を述べている部分です。ここでの「肉」は単なる肉体のことではなく、「人間性」を指す言葉です。特にその弱さ、もろさ、移ろいやすさを示す言葉です。つまり永遠の昔から存在しておられる三位一体の第二人格なる御子が、私たちと同じ「肉」となってくださった！そしてダビデの子孫として生まれて下さった。ピリピ人への手紙 2 章 6～8 節：「キリストは、神の御姿である方なのに、神のあり方を捨てられないとは考えず、ご自分を無にして、仕える者の姿を取り、人間と同じようになられました。人としての性質をもって現われ、自分を卑しくし、云々」。しかし御子について言うべきことはこれだけではありません。

4節にもう一つのことがあります。「聖い御霊によれば、死者の中からの復活により、大能によって公に神の御子として示された方」。これは御子の復活後の状態を述べているものです。御子は地上での低い歩みと復活を経て新しい段階に入られました。新改訳第3版では「大能によって公に神の御子として示された」となっていますが、ここには「大能によって」という言葉をどの言葉にかけて読むかという問題があります。ここでのポイントは、復活という出来事を経て、御子は以前とどう変わったかという点にありますから、御子が復活によって改めて御子として示されたというよりも、「大能の御子として示された」（欄外注参照）あるいは「力ある神の子と定められた」（新共同訳、2016年改訂予定の新改訳サンプル版）となる方が自然な展開です。

神の御子なるお方は永遠の昔から御子です。しかし人となり、へりくだりの生涯を経て、復活して高く上げられることにより、「力ある神の子」となられた。この力は罪人を救うことにおける力です。そのための権利を御子は地上でのへりくだりの歩みを通して勝ち取られました。マタイの福音書28章18節：「わたしには天においても、地においても、いっさいの権威が与えられています。」 エペソ人への手紙1章20～21節：「神は・・キリストを死者の中からよみがえらせ、天上においてご自分の右の座に着かせて、すべての支配、権威、権力、主権の上に、また、今の世ばかりでなく、次に来る世においてもとなえられる、すべての名の上の高く置かれました。」では「聖い御霊によれば」とはどういう意味でしょうか。これは御子は十字架と復活を通して、今や聖霊を豊かに注ぐことのできる方となられたということでしょう。御子は父なる神の右に上げられ、そこからペンテコステの日に聖霊をお注ぎになり、以来、この聖霊を通して「力ある神の子」としての働きを豊かに行なっておられるのです。

ここに福音のエッセンスがあります。永遠から存在する御子が、歴史のある時点で肉となって私たちのところに来て低いご生涯を歩まれました。そして死んで、復活し、力ある神の子として天に昇って行かれました。栄光の天から来られて、また栄光の天へと戻って行かれた。ここに何の意味があるのでしょうか。神の御子はただ地上への旅行をただけなのでしょうか。そうではありません！御子はこの行程において私たちを救うための完全なみわぎを行なってくださいました。神の御子がへりくだり、肉となって、私たちの罪と重荷を担って十字架にまで進み、私たちの払うべき罪の値を全部払い切ってくださいました。そしてそのみわぎを成し遂げて復活し、今やどんな罪人をも救うことのできる全権を持つ方として天に昇り、そこから力ある神の子として聖霊を通して働いておられる。神の御子がこのように地に下り、みわぎを行なってまた天に昇られたのは、私たちを天の祝福、天のいのちに生かすためです。ここに福音のすべてがあるのです。その方についてパウロは4節最後で「私たちの主イエス・キリストです」と言っています。簡単にだけ申し上げれば、「イエス」は地上に現れたこ

の方の人間性を、「キリスト」は旧約から示されて来た救い主の働きを、そして「主」は信じる私たちの主であると同時に、全世界を治める王の王、主の主であることを現わしています。この御子が「イエス」であり、「キリスト」であり、「主」であるところに福音があり、信じる者を救う神の力があるのです。

私たちは神の御子をこのようなお方として知っているのでしょうか。私たちはなお地上にあってなお様々な悩みや戦い、弱さのうちにあります。常に外からの助けを必要とし、うめいているような者です。その私たちはどこに救いを求めるべきでしょう。パウロは言っています。私たちのために栄光の座を降りて人となり、十字架に至る生涯を歩み、再び天へと昇られた救い主のうちにこそ！そして今や私たちを救うための偉大な力を持っていてくださる神の御子にこそ！と。私たちが仰ぐ必要のあるのは、この「力ある神の子」ではないでしょうか。信仰を通してこの方に結ばれるところに、この方の恵みは豊かに私たちに注がれます。ローマ書はこの福音について私たちに語ってくれています。私たちはこの書を通して多くの人々の人生を変えて来た福音の力に生かされたい。その中心にある「力ある神の子」によって引き上げられる救いと祝福の歩みへ導かれて行きたく思います。